

## 認識から体験へ グノーシス主義の変容？

大 貫 隆

### I H. Jonas の所説

#### A 神話論的グノーシス

- 1 Gnosis und spätantiker Geist, Bd. II,1: Von der Mythologie zur mystischen Philosophie, 1954, 122-170 (4. Kap.).
- 2 神話論的グノーシスが与える「認識」は、主体と客体を分離させた「思弁」と「表象」次元のもの。その説明は「後ろ向き」(=Vergangenheitsmythos: プロテイノス II 9,4: 「いったいいつ万有靈魂(=ソフィア)は過失を犯したというのか」)。「前向き」には行くべき道を間接的に暗示するだけ。人間が目的達成のために「今ここ」で何をなすべきなのか、その方法は何なのかは不明のまま。「実行に関する教え」が不在。あまりに超越的な神話はグノーシス主義者を本来の目標への到達のためには無力なまま放置する。
- 3 グノーシス主義者の存在=「待つ」こと。「本来のもの」に対して常に「外側」にある。キリスト教信仰の場合には、救いの暫定性は終末論の本質的な意味そのもの。神学的な原理としての威厳を持つ。しかし、神話論的グノーシスの場合は、自分自身の内側から設定されてくる目標に到達しない暫定性、つまり「欲求不満」あるいは「欠乏」→新プラトン主義の隆盛を準備した。

#### B 神秘主義 (Mystik, 哲学的グノーシス) への移行

- 1 前記の「欲求不満」は「存在」次元でのみ解決可能。→主体と客体の一体性
- 2 「認識」(グノーシス) が存在論的行為(=見られたものと同質の内的な見る行為)となること。思考しつつ内向することによって、主体は思考されたものの在り方に変えられて、純粋な存在の根源、世界の絶対者を発見して実現する。
- 3 神話の思弁的、事物的言語 →存在論的概念へ「非事物化」、「合理化」
- 4 グノーシス主義が二元論的に導出する物質 →万物・全存在の根源の自己運動の一局面となること。
- 5 神話論的な「過去性」 →「いつでも再現可能な、存在の純粋な内在的法則」、「原則としていつでも存在の物語の全般を司る合理的自律性」
- 6 この移行で神話論的グノーシスの客体性とその充満は失われる。しかし、「構造的なもの」(階層構造、落下あるいは降下運動、存在の頂点の無世界的な否定性、魂のこの世性)は保持される。→新プラトン主義との明白な形態論的類似性。
- 7 ヴァレンティノス派はこの移行の最先端 →「潜在的な神秘主義」。

### II 留保と修正

- 1 Jonas の言う「体験」、「経験」、「私にとっての実行可能性」は意識レベル。しかし、大貫『グノーシス「妬み」の政治学』p.161: 「神話が語る啓示は神話のテキストとして到来する」、「気がついてみたら、そうになっていたということ」→深層動態的統合
- 2 前記 B,6+7 に対して。ヴァレンティノス派は、グノーシス神話の最重要なトポス「ソフィアの過失」と「造物神による可視的世界の創造」について、その構

造上の位置価値、中期（新）プラトン主義に添う方向へ変更。

- \* プトレマイオスの神話（エイレナイオス『異端反駁』）
  - ・ ソフィアは（中略）軽はずみから心変わりしたのである。さて、そのパトスは父の探求である。（中略）彼女は不可能な事柄に自分を賭けたゆえにできなかった。そして父の深さ、探り難さと、また彼に対する愛着のゆえに、全くひどい苦闘に陥り、絶えず自分を前へ伸ばそうとした。（I,2,2）
  - ・ 彼（デーミウルゴス）にとって、この「作成」（創造のわざ）の原因は母であった。母アカモートは彼をこのように導くことを望んだのである。」（I,5,3）
  
- \* 『三部の教え』（NHC I,5、§ 24 大貫訳）

なぜなら、このロゴス（最下位の神+造物神）が生み出されたことは、父（至高神）の意志に反して起きたことではないからである。つまり、彼（ロゴス）の猛進も父なしには起きないであろう。（中略）それゆえ、この一連の動き、すなわちロゴスを論難することは適当ではない。それはそうなるべく定められた経緯の原因である。
  
- \* 前記 B,7 のように言えるのは、ヴァレンティノス派が「ソフィアの過失」を心理主義化して、神話論的グノーシスにおける構造を変更したからこそ！

### III 『ゾーストリアノス』（NHC VIII,1）

#### 1 文学的様式と内容

- \* 内容目次 → 配布資料 p.(8). § No.は大貫の私訳による。
- \* ゾーストリアノス（=私）が忘我境の内に、地上から多くの階梯を経て超越的領域へ上昇する。ただし、至高の存在「見えざる霊」（=一者、三倍力強き者：存在・至福・生命）の領域には至らず、その手前で帰還する。→ 図参照
- \* この構造自体は初期ユダヤ教文書『ギリシア語バルク黙示録』（日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』別巻・補遺 I、教文館 1979 年所収）に並行例がある。
- \* 明瞭に「私にとっての実行可能性」（Jonas）が中心主題 → 「見る」、「聞く（聴く）」、「体験」の語彙が増大。
  - ・ § 47-48 （前略）そして清く単純な状態になる程度に応じて、上へ昇って行く。彼が一体性へと到達する仕方はいつでも次のようにしてである。いつでも彼は清く単純でありつつ、認識と「存在」と霊と聖なる霊によって満たされる。彼にとっては、自分の外側には何も存在しない。彼はまず完全な魂によってアウトゲネースに属するもの、次に叡智によって「三重に男性的なる者」に属するもの、さらに聖なる霊によってプロトファネースに属するものを見る。他方で彼はカリュプトスについて霊の力によって聴く。その力とは、「見えざる霊」の至高の啓示によって、カリュプトスからやってきたものである。彼がそれを聴くのは今は沈黙の中に隠されている思考による。さて、彼は最初の思考によって三重に力強い見えざる霊について聴く。（エーフェーサークの啓示の一部）
  
  - ・ § 52 さて、洗礼はこれらの者のために、それぞれの状態に準じて定められている。アウトゲネースたちに至る道、その途の上でお前は今そのつど洗礼を受けたのである。

完全なる個別者たちを見ることはふさわしいことだからである。それはアウトゲネースたちの力から生じた万物についての覚知のことである。それはお前がこの上なく完全なアイオンたちをやがてわたり終わったときに体験(実行: eire)することである。(エーフェーセークの啓示 1 の一部)

\* 「私」は途中で啓示を受領する度ごとに洗礼を受け、そのつど該当する神的存在に「になる／なった」(shope)。

・ § 80 すでに救われてしまっている人間とは次のような者のことである。(中略) 彼は [純] 一な者となり、一者 (?) となった。(中略) もし彼がそう [望] むなら、これらすべてからまた再び離 [れ] て、自分独りの中へ引き下がることができる。なぜなら、彼は神のもとへ引き下がった後、神的な者となるからである。(エーフェーセークの啓示 1 の結び)

・ § 104 (アウトゲネースのアイオンで、イウーエールの啓示の後、通算 21 回目の洗礼の後) 私は形(モルフエー)を受け取った。そして私は私の表現を超えた光を受け取った。私は聖なる霊を受け取った。私は真に存在するようになった。

## 2 「私」が「見る」、「聞く」啓示の中身

\* 上方から下方へ、解釈天使によって仲介される (図参照)。

\* 神話的部分もあるが、分量的に限定されており、抜粋的な報告。圧倒的に多いのは「存在論」の論述。

§ 4-5 (序=存在の頂点についての問い) その時の私は、思考(エンノイア)、知覚(アイステーシス)、形相(エイドス)と種族(ゲノス)、部分(メロス)と全体、包括するものと包括されるもの、身体と非身体的なもの、実体(ウーシア)と物質、およびこれらすべてに属するもの、-これらのものの男性的な父を探し求めていたのである。それらと混じり合わされた「存在」(ヒュパルクシス)、(完全なる「子供」)の神、生まれざるカリュプトス、これらすべてのもの中にある力と「存在」を探していた。すなわち、もし今現に在るものが、存在するもののアイオンからやってきているのであれば、すなわち、見えざる、分割不可能な、しかも「自ら生じた霊」からの生まれざる「三つの似像」としてやってきているのであれば、どうしてそれら(今現に在るもの)は「存在」よりもすぐれた根源(アルケー)を持ち得ようか。また、どうしてそれらはすべてのものに先立って在りながら、「この世界」(コスモス)になることができたのか。

\* 下線部 →存在の頂点: 「三重の力強き者」= 「存在」+ 「至福」+ 「生命」  
→新プラトン主義の「存在」(オン、ヒュパルクシス)+ 「叡智」(ヌース)+ 「生命」(プシュケー)に並行。具体的には § 110-114 (NHC VIII64,13b-68,13 で Marius Victorinus『アリウス反駁』の冒頭部(否定神学)と共通資料を利用(M. Tardieu))  
\* § 167 「真に存在していないもの」、「真には存在していないもの」、「全くもって存在していないもの」 ←プラトン『ソフィスト』240b7.12, 254d1、『パルメニデス』162a3、プロクロス『ティマイオス注解』I,233,1-4

### 3 主体と客体の一体性、存在論的行為としての認識 (←B1-5)

3.1 § 47 「自分の外側には何も存在しない」、§ 80 「自分独りの中へ引き下がることができる。なぜなら、彼は神のもとへ引き下がった後、神的な者となる。」

#### 3.2 神話的物語の過去性 (B5)、思弁的かつ事物的言語 (B3) の残存

- § 19-21 (ソフィアが下方を眺めて暗黒を生み出す。造物神による世界の創造)

失われた暗黒から生まれた物質の根源 [ ±3 ]。ソフィアがそれらを眺めた。そして彼女は暗黒を生み出した。(中略) [被造] 物のアルコーンは彼の言葉によって蒔いた。しかし彼には、永遠なる者たちの誰かを眺めることは不可能だった。彼は一つの模像 (エイドーロン) を見た。そして彼はその中に見たその模像に従って世界を造った。彼は模像の模像に従って世界を創造した。そして目に見えるものであったその模像さえも彼から取り去られた。しかし、ソフィアには彼女の回心と引き換えに安息の場所が与えられた。§ 57 「それはソフィアが下方を眺めた所為である。」

- § 128-129 (バルベーローが下方に傾く)

真に [存在する] 者」を把握することは不可能である。なぜなら、彼は [ ±5 ] の中にいるからである。(中略) 彼女 (バルベーロー) は妬みに陥った。なぜなら、彼女は彼の似像と結びつくことができないからである。(中略) その方は 15 先在し、すべてのものの上にある。彼は先在し、「三重に力ある者」として知られる。「見えざる霊」は実に未だかつて一度も無知でいたことはなく、知るといふこともしたことがない。むしろ彼は完全で「至福」の中にあっただのである。(中略) 彼女 (バルベーロー) は個別の存在としては、下方への傾きの原因であった。彼女があまりに遠くへ行ってしまうように、そしてまた、完全性から離れすぎないように、彼女は自分自身とあの方を知った。そして彼女は独りで立って、あの方のゆえに広がった。そして彼女は真に存在するあの方から存在していたのだから、万物とともに、自分自身を知り、先在する方をも知るようになった。

#### 3.3 いつでも再現可能な存在の純粋な内在的法則、言語の「合理化」

- \* カリュプトス、プロートファネース、アウトゲネースの「合理的」生成論

§ 41 カリュプトスは自分自身を生む者であり、アウトゲネースの先在の根源であり、神的で最初の父であり、プロートファネースの原因であり、彼の部分にとっての父であり、最初に知られるが、知られることがない父である。なぜなら、彼は自分自身が一つの力であり、自分自身が父だからである。だから彼には父がない。

- \* バルベーローの「合理的」創成論

§ 122-123 彼 (至高の見えざる霊) は純一なる一者である。完全性によって「至福」であり、完全で「至福」なる一体性であった。それはかの者 (一者) のこの点を欠いている。なぜなら、彼女は彼を欠いているからである。なぜなら、彼 (一者) は覚知によって彼女を補う (後からついてくる) ものだからからである。その覚知とは一者についてくるが、彼は彼を探求 (瞑想) する者 (バルベーロー) によって彼自身の外にある。しかも彼自身は彼自身の内にある。」

- \* 人間については、造物神による「身体」の創造 (§ 21)、個々人 (例えばゾー

ストリアノス)の魂が肉体に入る出来事としての誕生 (§2)、その逆としての死 (§6)について明瞭に言及がある。しかし、身体の中への神的本質が宿ることになる経過については神話論的物語がない。(ただし激しい本文の損傷のせい?)

\* いずれにしても、神話的な宇宙創成論、神統記、人間創成論、終末論は大幅に後退。

3.4 神話論的グノーシスの側から神秘主義への大幅な歩み寄り。神話の「いつかどこかで」から哲学の「いつでもどこでも」へ。

**§ 191** 君たち、活ける者たち、セートの聖なる種子たちよ、真理を知りなさい。私に耳を傾けないままでいてはいけない。君たちの神を神に向かって立ち上がらせなさい!そして邪気のない選ばれた魂を強めなさい。そしてこの場所に在る変転に注意しなさい。むしろ、変転なき生まれざることを求めなさい。これらすべてのことの父は君たちの中に在りつつ、君たちを招いている。

#### IV 結び

1 プロティノス「グノーシス派に対して」(II,9)の論争相手=『ゾーストリアノス』(あるいはその異版) ←別表対照表参照

2 プロティノスは『ゾーストリアノス』の何を拒絶するのか。「物質」(素材)の位置づけか?

3 『ゾーストリアノス』は、物質の生成をソフィアが下方を眺めた行為と結合する(前出 § 19)。その語り口は確かに神話論的だが、「ソフィアの過失」という否定的評価は行われていない。マクロに見れば「万物・全存在の根源の自己運動の一局画」(Jonas, 前出 B4 参照)という位置づけに向かっていると見えよう。

4 加えて、プロティノス『悪とは何か、そしてどこから生ずるのか』(I,8) → 素材(物質)こそが「絶対悪」(形のなさ、限定のなさ、全くの非善)。「魂よりもまえに素材自体が悪なのであり、それも第一義的な悪だということ」(14章)

5 では分岐点は他にあるのか? 「この世界」に対する評価か?

6 『ゾーストリアノス』は「この世界」が破滅に定められていると言う。ただし、周縁部での発言 (§ 18+23)。

7 同類の『マルサネース』(NHC X) § 14

さて、私はこちらにあるものすべての退落、向こうにあるものの不死を知った。私は識別し、感覚的で個別的な世界の限界、すなわち、非身体的な存在のすべての場所に達した。そして、叡智的な世界も識別して認識した、感覚的世界は全くもってそのすべてが保全されるに値するということ。

8 未決の問いをもって終わる発表。